

クライマーとして子どもたちとかかわり続ける

Anne Arran さん



UIAA（国際）青少年委員長として、青少年から子どもたちのためのプログラムに数多く取り組んでいらっしゃるアン・アランさん。現役クライマーでもあるアンさんが1月に開催された「国際自然環境フォーラム」のために来日された折に、お話を伺いました。

（通訳：佐生博夫）

（インタビューと文：張晶子）

◆子ども時代はどんなお子さんでしたか？

—いつも外を走り回っているお転婆な女の子でした。探検が好きで、与えられた人形は異国の風情に勝手にアレンジしてしまったりしていました。ピアノの前には座っていませんでしたね。

◆山に登り始めたのはいつ頃からですか？

—7才くらいから家族とハイキングを楽しんでいましたが、10才で初めてアルプスを見ました。13才の夏に、オーストリアで山小屋から山小屋へと歩く経験し、16才でクライミングを始める許可を両親からもらいました。

国立登山研修所の入門子どもコースに五カ月間入りました。ここでロッククライミングを初めて学んだのです。

これがとても楽しかったのです。日に日に小さなスタンスに立てるようになって、壁に取り付いてみると視界がどんどん変化して行くことは面白い体験でした。

◆どんな山を登ってこられたのですか？

—それから山岳会に入って、毎週末クライミング通いです。大学に入ってからも続けました。1999年にはキルギス遠征に参加しました。この時は、未踏の岸壁に二つの新ルートを開拓するものでした。6人の英国人と2人のキルギス人のパーティーでした。でも、折りしも政治的混乱があり、(日本人専門家が2人ウズベキスタンで誘拐された時です。) 私たちも英国領事館に止められてしまいました。

◆子どもたちの活動にかかわったのは？

—人工のウォールを使って、インストラクターとして子ども向けの教室を始めたのです。これは、一つのビジネスモデルとして、大学院での修士論文のテーマにもしました。

その後、英国クライミングチームのメンバーになってから、ジュニアナショナルチームのコーチになりました。

子どもに教えるのは、逆に刺激されることも多く、学ぶこともあります。子どものほうが覚えるのが早いし、楽しんでくれます。どんな年齢でもできるのがクライミングです。

◆現在は UIAA の青少年委員長でいらっしゃいますが、具体的な活動を教えてください。
— 昨年は 28 の国で 10 のイベントを開催し、350 人の参加がありました。トレッキングやクライミング、スキーツアー、エクスペディションもありましたし、環境の学習や平和へのアピールなど、リーダー講習を行いました。

2006 年にイタリア山岳会主管で行われた子どもの育成方法のセミナーでは、エコロジー、物理、地理、天文、地域の人口や歴史、地域行政などの項目についての課題が集められました。

ワークキャンプでは、山崩れの場所を探したり、植樹をする環境活動を行いました。クリーン活動を通じて、山に形跡を残さない (LNT=Leave No Trace) の考え方を実践します。

スロベニアでは、年齢別に登山教育システムが実践されています。標高で行動範囲を決め、6 才以下からレベルに合わせて木の葉遊びから、15 才以上では山の事故例の分析まで、登山学級に力を入れています。

フランスでは、全国 27 の地域のうち 24 で 247 団体のクラブの 5000 人のボランティアが探検学校やクライミング学校を展開しています。

UIAA では 2005 年の国連ワールド・ユース・レポートの中で、ゴミの問題・環境保全・青少年団体の支援策についてまとめをしました。この中では、活動の主催者たちが行政に対してフィードバックをして行くことが重要であるとしています。またメディアも無視できませんし、研究者たちに向けて環境データを集めるなどするなどの具体的な環境活動につなげて行くことも、若者の活動といして重要です。

また、少し前まで紛争のあった地域の山をきれいにしてゆくことで、平和の活動に有機的に結びつけることも出来ます。

◆ご自身の現在のクライミングを含めた活動状況は？

— 今はフランスのピレネーに住んでいます。まだ改修など忙しいのですが、夫は国連職員でパキスタンで仕事をしています。今後パキスタンでの未踏の壁に挑戦する計画を立てています。

2008 年には、ベネズエラで未踏の壁を登りました。350m の 7 c レベルのトラッドク

ライミングでした。

◆ 日本の自然環境教育についてどう思われますか？

—今回いろいろ興味深いこともありましたが、具体的にクライミングとはどう繋がるのでしょうか。子どもたちに直接授業を行うなどして普及することが大事でしょう。

FACE-BOOK などを利用しての普及もこれからは考えられます。

◆ 国際自然環境フォーラム、日山協 50 周年式典、と短い来日期間のお忙しい時間を縫ってのインタビューでしたが、クライミングのお話をする時の瞳のきらめきにお転婆少女の面影を確かに拝見いたしました。

また、HAT-J の活動が UIAA イベントとして承認される可能性もあるというアドバイスに心を強くする思いを頂きました。